

情報データーリテラシー演習にみる 応用化学課程 1 回生の PC 関連事情

鈴木 智 幸*
suzuki@kit.ac.jp

1. はじめに

本学応用化学課程では、1 回生を対象とした演習科目として『情報データーリテラシー演習』（注1：2022 年度より改称。旧科目名は『情報処理演習』）を行っている（注2：演習端末数の都合上、ma、mb、および mc の3つのクラスに分かれ、更に、各クラスは2つの演習室を Web 会議システムで繋いで、2室同時進行で実施）。当演習科目は、Windows 10 の PC 端末を使い、ネットワーク上のマナーや著作権に関する基礎知識、Microsoft Office ソフトウェアの活用、化学構造式の描画などに関する演習を行い、大学の学習や研究で必要な、一定水準の PC スキルと情報リテラシーを習得することを目的としている。当演習を行うにあたり、例年、入学時点の PC スキルと情報リテラシーの実態調査と、演習時の個別フォローアップの必要性の有無を確認するためのアンケート（記名および匿名形式）を初回演習時に行っている。本稿では 2023 年度 4 月に実施したアンケートの数値データを抜粋し、応用化学課程 1 回生の PC 関連事情について報告する。

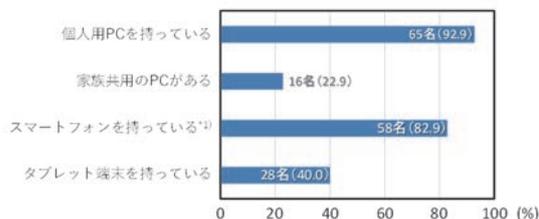
2. 2023 年度アンケート調査結果

2-1. ハード面およびソフト面の環境

図 1 に、応用化学課程 1 回生の PC 関連のハード面およびソフト面の環境を示す。直近、本学入学以前、2020 年の新型コロナウイルス感染症に係る緊急事態宣言により、中・高校においても全面オンライン講義になったことも要因の一つとして考えられるが、大半の学生が個人用 PC を所有している（図 1 (a)）。家族共用の PC 所有も一定数あることから、全ての学生の家庭に

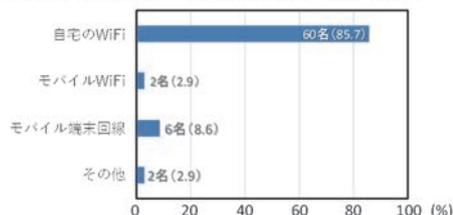
PC があると推察される。なお、スマートフォンの所有率が低いのは、複数回答の設問としたことによる選択漏れと考えられる。また、インターネット環境は固定およびモバイルを含めて接続手段を持っていることが伺える（図 1 (b)）。ソフト面に着目した場合、大学入学までに何らかの PC 教育を受けていることが分かるが（図 1 (c)）、例年、大学入学までに PC を使った実践教育を受けていない学生が、少数ではあるものの一定数いるため、当演習はその点にも留意しながら行っている。

(a) 家庭の IT 環境（有効回答数：70名, 複数回答）



*1) 所有率が低いのは、複数回答の設問としたことによる選択漏れと推察される。

(b) 家庭学習（オンライン講義）の通信回線（有効回答数：70名）



(c) これまでのPC教育（有効回答数：68名）

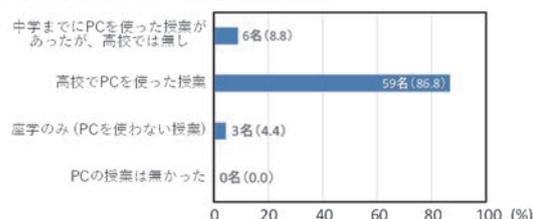


図 1 応用化学課程 1 回生の PC 関連のハード面およびソフト面の環境。

* 材料化学系 助教

2-2. Office ソフトウェアの利用

図2に Microsoft Office ソフトウェア (Word, Excel, Power Point) の利用経験を示す。近年、小・中・高校での PC 関連授業の導入により PC に接する機会が増え、過去のアンケート結果と比べて Office ソフトウェアの利用経験者数は多くなっているが、すべての学生に各 Office ソフトウェアを利用した経験があるわけではない。緊急事態宣言に伴う 2020 年の全面オンライン講義以降、応用化学課程においても 1～3 回生の段階での Office ソフトウェアの利用機会が増加しているため、私見ではあるが、当演習の重要性は高くなっていると考えている。



図2 Microsoft Office の利用経験。

2-3. メールの利用

図3に、メールの利用経験の回答結果を示す。大学関連の情報のやり取りに際して、差出人の身元保証、情報の機密性確保、迷惑メール判定 (振り分け) 回避などの観点から、大学のメールアカウントを利用すること、また、メール送信時には、件名、宛先、差出人を明記することを当演習内で周知している。しかしながら実際は、使い慣れて手軽な無料 Web メールやキャリアメールなどから送信する学生が、1 回生に限らず散見される。また残念なことに、件

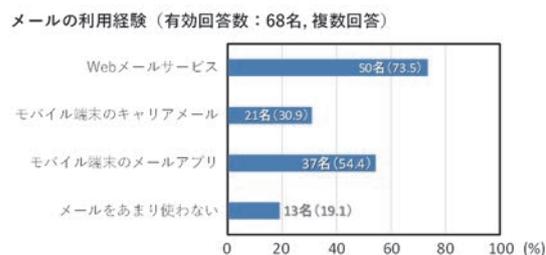


図3 メールの利用経験。

名、宛先、差出人の無いメールを送信する学生も見受けられるが、今回のアンケートにおいて『メールをあまり使わない』学生が約 2 割おり、普段のコミュニケーションツールがソーシャルメディア主体になっているのがその要因の一つとして挙げられる。情報リテラシーならびに常識的なビジネスマナーの観点からも、早い段階で正しいメール利用が出来るよう、当演習でもより一層、学生の意識を高めていく必要がある。

3. おわりに

当然のことながら、大学入学時点の PC スキルと情報リテラシーのレベルには個人差がある。当演習は、アンケート調査結果を踏まえつつ、学生のレベルに柔軟に対応できるよう、ティーチングアシスタント (TA) を各演習室に 2 名ずつ、計 4 名配置し、演習中のどのタイミングでも挙手で質問を受け付けて個別対応し、取り残される学生がいないように配慮して進行する形式を取っている。担当教員の一人としては、受講した 1 回生が、今後の学習や研究 (あるいは社会人になってから) のふとした機会に、“あの時、情報データリテラシー演習を受講しておいてよかった”と、ほんの少しでも思ってもらえれば本望である。